

ハマの盛り場

白神義夫

エキゾチシズムの中に、ちよつと野暮な汁をたらし込んだのがハマの盛り場である。

そこに安堵感と親しみがあがる。歩く人は年ごとに変わるけれど、変らぬ性格を残しているのが盛り場でもある。

一——伊勢佐木町

斜陽の町といわれてきた。

往年、「伊勢ぶらをしないと眠れない」というハマッ子が少なからずいた頃と、思い合いあわせると、やはり「地盤沈下は確か」

と、判定の下すほかはなかったのだらう。

う。

中区制五十周年を記念して来年、発刊予定の「横浜中区史」編集委員会が、各町内会へ照会して、古老たちの記憶を呼び戻したのをもとに作製している記憶絵図がある。

その中のひとつ、林敬一さん(五九)の話によると、

「当時の伊勢佐木町は、一、二丁目が銀座の雰囲気だった。三、四丁目が浅草、五、六、七丁目が神田といったところ。

一帯は商業、娯楽の一大中心地で、二、三丁目入り口にあったのが日本の洋画専門館第一号のオデヨン座。

若き日の飛鳥田一雄委員長(社会党)

も、ここに通いつめた揚句、

「映画監督を目指したこともあった」と、述懐しているほどだ。

東京より早く封切ったので、当時の東京の学生や若者たちの間でも、

「ハマへ映画を観に」というのが、ハイカラさんの資格だった。

隣は又楽館(ゆうらくかん)。斜向いには、芝居小屋の喜楽座があり、その他、芝居の朝日座、敷島座、浪曲専門の寿亭

(後の大都館)が林立。夜七時半からの割引きには、ベルが鳴り、近くで時間待ちしていた客が、ドツと詰めかけた。

横通りには夜店も出て、アセチレンガスの灯を募るファンも多かった。

戦時中も伊勢ぶらはハマッ子の楽しみの一つだった。生徒児童たちは当時は映画館、飲食店に親同伴以外に出入りすることを禁止されていたし、戦火が拡大するにつれ、そのような対象も減っていった。

一——伊勢佐木町

二——野毛

三——中華街

四——元町

五——横浜駅西口

戦時中も伊勢ぶらはハマッ子の楽しみの一つだった。生徒児童たちは当時は映画館、飲食店に親同伴以外に出入りすることを禁止されていたし、戦火が拡大するにつれ、そのような対象も減っていった。そんな中で明治キャンデーストアと森永キャンデーストアだけが、大学生たちの集まり場所だった。明キャン(メイキャン)・森キャン(モリキャン)と愛称し溜まり場になっていた。ちよつと軟派の若者たちや、自称硬派の学生たちが、表を通ったり、たまに店に入ってくる女学生がいるとソワソワと意識して声をかけたりして騒いでいた。

戦後の伊勢佐木町は不幸な立場にあっ

た。

進駐軍に町のあちこちを占拠されていたからだ。たとえば一・二丁目商和会の目貫き通りがPXで、ガラス越しに、中で軍人や金髪的女性が優雅に食事したり買物したり、話をたのしんでいるのを、飢えた日本人が眺めてションボリしていた。

中からは二階で表に向かってソファに坐わり、パイプをふかしながら、アチラさんが見下ろしている。さも珍らしい動物でも見つめるように――。

表には、こんな軍人を対象に、靴みがき、似顔書きから、煙草、チョコレートを買ってもらおうとする者が店を張っていた。

「ここはどこ国か」

誰でもそう呟いた。

確かに復興が立ち遅れていた伊勢佐木町は、横浜駅西口の人エタウン完成と元町の繁栄に影響されて押され気味なのは否定出来なかった。

「人々が散歩そのものを味わう気持ちがうすらいだからだ」

「戦後は交通の便だけが第一」

「目玉になる施設が不足している」

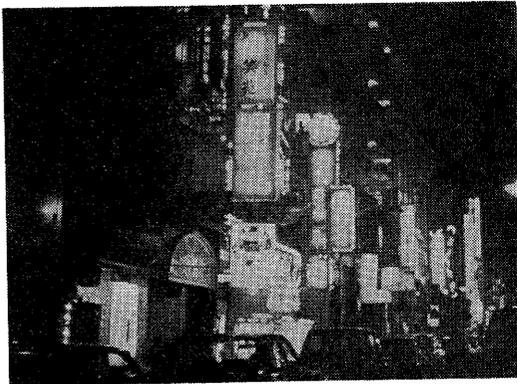
「三丁目から先になると、急に人通りが減る」

そのどれもが当たっていた。朝の開店が東京の盛り場に比べ遅く、夜の閉店も早

すぎる。「夜になると歩いているのは酔っぱらいばかりだ」とさえ評された。

隣接の福富町、若葉町、浜っこ通り(往年の親不孝通り)はバー、キャバレー、トルコ、のみ屋が密集しているのはいいとしても、中に暴力的なバイラー(ほん引き)が数十人いて、出没するのはいたらない。

清潔な市政のイメージとは裏腹に、中では福富町がいたずらに川崎・掘の内とならんでトルコの町として勇名(?)を馳せたり、このバイラーが名物になったのではハマツ子が泣こうというもの。名物といえば、一頃、国際酒場(大宅壮一



命名)として、もてはやされたN屋も、

黒沢明監督の映画のモデルにされたところがピークで、往年の魅惑は失われ、色あせてしまった、

外国兵、外人マドロス、外国人旅行者の絶対数が横浜の町から激減したのだから仕方あるまい。

五十三年十一月十一日、伊勢佐木町通りのショッピングモール事業が完成した。

アーケードを全面撤去した時には、「なんだ。ベトナムの街みたい汚ないのが丸見えになったヨ」

「テナントもテンデンプラバラで、終戦直後に逆戻りだナ」

と、一部に悪評もあったが、緑化推進の大改造。総工費七億円をかけて、とにかく全国三番目の買い物公園とした。

このモール化によって商店の床面と道路の高低差が生じ、

「物理的にも改装せざるを得なくなっただ」店も少なくな、

「大通り公園とこの通りを循環することで、人の流れがドッと増え、再び人気を集める街に生まれ変わるだろう」

と、踏んで、商魂たくましく再出発をしたわけだが……。

先ずは「お手並みを拝見」しよう。

二 野毛

幼なかつた美空ひばりがデビューした劇場――国際劇場やマッカーサー劇場のあったのも何かしら夢物語のようだ。

戦後はヨコハマの「浅草」だったこの町の性格も表情も少しずつズレてきた。

そういえば大江美智子が暫らくの間、拠点にしていた日の出劇場跡も、元のキャバレーに戻った後、空家となり、五十二年、焼けてしまった。弘明寺にあった金井修劇団の常打ち小屋とともに、横浜における実演劇場のはかなさを証明している。

野毛の代名詞のようだった中税務署も山下町に移転してしまい、後地はそのまま遊んでいる。まわりは夜の酔客の立ち小便の地となり、犬の糞がいたずらに目立つ。

思えば、敗戦直後の怒濤の日々、税務署横は夜の姫君の立ち並ぶ所でもあった。

「安くしとくから、遊んで行ってヨ」

「持ち合わせが少ないんだ。もう少しまけるよ」

客も女も万事、素人っぽかった。

戦争中、持ちこたえていた道徳や、矜持が小気味いいほど素っ飛んでしまった。

心の拠りどころを失い、価値判断は逆転してしまっただ。

いわば、倫落の時代に、ふさわしい町

ともいえた。

ヤミ市が栄えた。

食料品から衣類、クツ、日用品、何でもあった。横浜中の人々が、蝟集した。便利な処はここにしか、なかった。活気に満ちた町であり、その悪徳の匂いに、新しく生きる力を見出しつつあった人々は、酔い知れていた。

鯨横丁の名も生まれ、クジラの肉が、食欲をそそった。味噌で煮る臭いが風にのり、肩からカバンをかけた男や女を立ち止まらせた。

歩いてる人間がふと立ちどまり、上衣を脱ぐと、

「それ、いくらで売るんだ」
人々が集まり、値をつけ、何となく商談がまとまり、売った金で、クジラの肉をしゃぶっている。

誰でもが売り手であり、同時に買手で

あり得た。思えば、気楽な時代であり、素直な蕃人のような腕力を、みなが持っていた。

あの頃が、野毛の活力が十二分に発揮出来た時代であった。

「野毛でなければ、夜も日もあけぬ」時代でもあったからだ。

隣接の伊勢佐木町の接収が続いたのが、なおさらこの町を栄えさせた。

野毛の露店から、大きな店を数軒（県外にも）持つ靴店が生まれたのをはじめほかの地で立派な衣料店、洋服店、飲食店（寿司屋、中華料理店）を構えた例は少なくない。

だが、野毛そのものは、伊勢佐木町が本来のベースを取り戻すと、横浜市民にとっては「取り分け、行かねばならぬ町でもない」所となり、魅力を失ってしまった。

画などの映画劇場三のほかパチンコ屋がはやり、

「気のおけない」

のが売り物なので、夜になると、安直さを求めて、若い公務員、サラリーマン、労働者の流れが、町の血脈を動かしている。

それにしても、ゴールデンセンター六階の「瓦」（一フロア全部が、いっぱい呑み屋の感じ）の誕生で、

「関内、日本大通り方面からの客が、野毛口へ通り抜ける寸前に、『瓦』に吸い取られている」

と見られている。

下町らしい試みとしては、柳通り商店会の主催で、毎月一回、野毛落語会が催されていることだ。

東京から二ツ目、真打ちクラスを二、三人招き、和風喫茶店の二階の座敷で、

会員たちに、たっぶり一人一時間の落語を披露している。近くの店の経営主が会員の中心で、会員証がわりのお揃いの座布団を抱えて三々五々集まるころなど、さすがに下町の粋が残っている。

ふぐ屋の多いこの町では、餅をついて売る子供相手の駄菓子屋もあって、その餅をふぐ屋に売るなど共存共栄のルールもある。

異色な店では、福音喫茶というのがあり、この店では、酒をのんだ人は入れず

店内では喫煙も禁止。流れる音楽は讚美歌だけだ。

そのかわり毎週一回、夜の伝道会、屋間の礼拝日があり、キリスト教会の「出店」にもなる。

防災面からも再開発の必要を迫られている野毛地区は、大改造を早くからいわれている。

野毛周辺再開発計画は、地域ごとに設立された今や六つの準備組合の間での意見調整が進められているのだが。

三——中華街

終戦直後、禁制品のヤミ米（銀シャリ）のカレー、握り飯、食用油が大手を振って何でも大道で売られた。第三国人の

「治外法権」みたいなもので、それは悪徳の持つ魅力にも似ていて、人々がこの街を見なおしたほどだ。

治安が行き届くようになってから、平常に戻って、中華街は静かに変革を遂げてきた。

だが、夜のこの巷は、怖い一面を持っていた。それは「女」をめぐるトラブルがすべてだった。

裏通り、横丁には外人バーがひしめいていた。アメリカ兵、外人船乗りが客筋で、うまく女をキャッチしたら、「本牧あたりへ連れて行かれた」



今では、動物園の客も、この町を素通りしてしまい、土曜、日曜の「場外馬券」で、交通整理の警官が出るていどが、特徴といえれば特色の町になってしまった。

やきトリ、ふぐ、おでん屋の多いのが目につき、ピンク映

女の借りた部屋があったからで、または近くの「話のついでにホテルへ」しけ込んだ。

だが、瞬間的には、客の頭数の方が女より多くなるため争いが起った。

嵩じて路地裏で黒人兵が殺されたこともある。

アメリカ式の喧嘩は、西部劇さながらで、一対一でおっ始まった際は、仲間たちはグルリと取り巻いて見物するものの手出しはしない。

「おいジャブ」

「そこでストリート」

と口で応援するだけだ。

ホステス全部がろう啞者というパーもあり、評論家の草柳大蔵氏も、

「さすがヨコハマだな」

と、溜息をついていた。

この種外人パーは、とかく売春、ドル買い、麻薬、外国煙草、ライターの石、外国酒にまつわる噂や、トラブルが起る可能性もあった。

横田基地に到着したばかりのベトナム婦休兵には、

「ここは行ってはいけない」

と、紙を渡されていた。

その中に、この中華街の外人パーも含まれていた。

だが、

「怖いもの見たさ」

か、仲間からの伝聞のせいも、中華街の外人パーへ直行する者が少なくなかった。悪い店では足許を見て相手が日本の貨幣価値を知らぬのをいいことに、

「ビール小瓶一本一万円」

の割りで、前取りし、泥酔させてしまると、表へ放り出す例もあったほどで、

これはバイラーと組んでいた——そんな所中ではあった。

これらの狂い咲きの花も、アメリカのベトナム撤退により、潮のひくように消えてしまった。

外人パーは、まともなマドロスの常連

を持つ店を残してすべて、転向した。

純喫茶店や中華料理店その他に。

中華街は、このところ、店舗改造の時期にきており、次ぎつぎに改装している。

この街に限っては、

「汚くて小さい店がおいしくて」

は、もはや神話に過ぎず、

「店きれいでないと、ニッポンのお客さんコナイネ」

と悟っている。

中華街音頭をつくって、PRにつとめてもいる。地元で作詞・作曲したものでレコードに吹き込んで客に配った。

今も、有線放送では毎日のように流されている。

中華街発展会というのがあり、大通りはじめ、周辺の店が、自由意志で参加し

ている。

会長は日本人の肉屋サンで、副会長は中国人の中華料理店主といった工合で、仲よく会をすすめている。

横浜球場が完成以降、来街者も増えて

いると、同会でもみている。

また日中条約締結後も、

「一種のブームなのか、お客さん、高いものたべてくれるネ」

と云っている。

周辺の道路を修理、大通りはじめ歩道を設け、ついでにガス、下水道も修理、場所に応じ、ガードレールも設けた。

日曜日の歩行者天国も実行出来、国慶

節などのパレード、竜舞い、獅子舞いは見物人で黒山のように。

あとは、五月の国際仮装行列に、竜舞

いの参加復活が待たれている。

内外ともに、美麗に改造されつつある

中華街は今や、ピクともしない名所にな

っている。

広東料理をはじめ四川料理、北京料理、

上海料理、京蘇料理、台湾料理と種類の多い上、最近では、「中国料理」を看板に、いろいろな料理をミックスした店が生まれつつある。

大通りの牌楼（パイロウ）を中心に、西門、東門、北門、南門とすべて完成。

中でも南門は門の完成を期に、南門通り商店会を結成。店舗も増やし、改装、

雰囲気を一変させ、「ふれあいの街」をテーマに、さまざまな企画を実行している。

四——元町

元町には、「屋の顔」しかないというのは協同組合元町SS会（打木吉則会長）である。

そのかわり、

「昼間は若い女性中心に華やいている」とくに、チャームिंगセルの期間などは、最寄りの国電石川町駅では、臨時に

よそから駅員の応援を頼むほどの切符の

売れ方で、駅から元町へ通ずる道は人が

溢れている。

東京や鎌倉に住所のある人たちが争うように口座をY銀行元町支店につくっている。流行のようだ。かなりの口数が、

しかも高額に。

これは、現金を持たずに、元町へやってきて、

「気に入ったモノがあった時、銀行でオ

ロす」

わけで、ヤングレディでも、数十万円

をこの町の銀行に預けっ放しにしているのも珍らしくない。

オロオロのが集中するのは、

「何といっても、チャームिंगセルの時」

とのこと。

どうやらこの街にしかないオリジナル商品が魅力らしい。

それにしても、一時、

「チャーミングと思っただら最初からパーゲン用につくられたものだった」という苦情も持ち上がったこともあった。

チャーミングセールは、原則として、

「ふだん売っている品を二割〜五割引いて売る」のでなくてはならぬ。

それなのにパーゲン用を交ぜるようなことが横行したら元町の墮落である。客も放れよう。

SS会でも、

「会員といっても、みんな一国一城の主人だから規制したり、指示出来るわけがない。すべて自覚を待つ」と

と思ひあたる店の反省を求めていた。

元町は朝十一時、店を開き、夜は早いのは七時には戸を閉める。

客は一応ヤングなのだが、

「とはいっても、やはり高額なものを買うのは三十五歳以上の女性。二人きりでも欲しがるのは若い方で、財布を取り出すのは同伴の年上の女性」

この街の特徴は何回か街ぐるみ脱皮を近づけてきて、どうにか成功していることだ。

その度に、「ついでに行けない」店は、店や土地を売るか、ビルを建てて、貸しビ

ルとして、自らはオーナーになっている。

約二百店のうち、

「元村(もとむら)」の昔から残っているのは五店で、約八十店が戦後、交替した新しい店である。

ひとくちに、おしゃれの店というものの、業界の厳しき、難しさを物語っている。

独自のオリジナル商品を目玉にする一方、英、仏、伊、西独、スイス、オランダ、スペインの主要都市の商店街と姉妹ストリートとの関係を結び、商品の交流、情報交換、流通経路を短縮しての直輸入につとめている街でもある。この町にも名物という人物はいる。

その一人元町三代の粉川平義さんは、祖父の流れをくむ金属彫刻をやっていたが、表通りの店は人に貸し引っ込んでいた。

また粉川さんは東洋斎弁慶の名でアマチュアの手品師。無料で知人の各種祝賀会や老人ホームで芸を披露するのを生き甲斐にしていた。

五 横浜駅西口

横浜駅西口―戦後は、コップ酒を売るよしず張りの屋台がポツンとあるだけで、あたり一面、焼野原、石炭置場があった。「裏駅」「駅裏」と呼ばれていた。

「女の一人歩きなどんでもない」といわれ、事実、女性が襲われることも珍らしくなかった。

あの時点で、現在の発展ぶりを見出された人は、おそらくいなかったのではな

いか。

いま横浜駅西口振興協議会には、相模鉄道、相模興業、横浜ステーションビル、横浜地下街会社、横浜高島屋、相鉄ジョ

イナス、相鉄有名店会、ダイヤモンド地下街、ニューダイヤ(おかだや地下)。

これに加わっていないものに、三越、おかだやがある。

何しろ一日、百五十三万人を吞吐し、一日二千三百万円を売り上げる横浜駅に直結した商店街である。

商圏としてみると、三百万都市、六百万の商圏である。

だが、キラキラしたこの人工盛り場の裏町には、人生の断面図がある。

五番街に足を入れると、急にオコリが落ちたようになる。ここは、全国どこにもある場末の気やすさが身を包んでくれるからだ。

パチンコ屋、飲食店、酒屋、赤ちょう

ちん、焼き鳥屋が並び、ちかくにストリップ劇場、ピンク映画館がある。

この通りを抜けた所に屋台が並ぶ。午後四時を過ぎると、客が顔を見せ始める。

屋台といっても固定式。自家用車で乗りつける店主は、持ってきたネタを並べ

開店の用意だ。フラフラときた風呂敷包みのおじいさんは、パチンコ屋で取ったのか、たばこを安く卸してゆく。酒屋の御用聞きもやってくる。

パー、キャバレーの仕入れと違って、すべて客の目の前で取引きが行われるので、店の仕かけがあるていど判ってしま

う。

終戦直後の新宿ハーモニカ横丁のような名残りすらある。必ずしも安くはないのだが、こんなところに郷愁を覚えるのか、人工街に飽きたサラリーマンの若者グループが時にはOLもまじえて、流れてくる。

彼らもある種の屋台愛好家なのか。さて、人工街の方では、高島屋が拡張

工事を終え、決定的に売場面積をモノにすることに成功。

ニチイも東神奈川駅前に進出した余勢を駆って、西口にも進出。

「人の流れを変えた」とさえ言われている。

正に、販売戦線異常あり、である。

おそらく、限度ギリギリにまで膨張し続けている西口は、これからも果敢な、油断ならない戦いぶりを互いに進めてゆくのだらう。

〈TVK特別囁託〉